4・演じる幼女

「焦らすなら二回。それだけ焦らしてから三回目に会うのが効果的なのよ。昔、大陸の凄い人がそんな方法で、なんか偉い人のハートをゲットしたって話らしいよ？」

「えーっと……「三顧（さんこ）の礼」の事だとしたら、ちょっと話が違うと思うな……」

そうなの？　私はこれを「孔明の罠」という恋愛テクニックだと聞いたけど……違うのね……まあいいわ。私はホール長に「私を訪ねに来た初顔の客」がいることを告（つ）げられていたが、初日は店にも顔を出さず、二日目は見つからないよう隠れてやり過ごしたんだけど……三日目の今日、そこまで拒む理由を尋ねられたので答えたのが今の。私が誤って覚えていたかどうかはさておいて、実際に焦らしのテクニックとしてはこれくらいがちょうど良いし、これ以上はむしろ逆効果になる。私は初めから今日ちゃんと会ってあげるつもりでいた。

「随分可愛らしい子ね」

落ち着かない様子で席に座っている一人の男性……今日も私服なのでイマイチ学生なのか社会人なのか判断できないけど……先日の彼が、姉にソックリだという私を訪ねに来ていた。それを今、私はホール長と一緒に彼からは見えづらい厨房の隅から眺めている。よしよし、あの緊張っぷりからこっちのペースに話を持って行くのは容易そうね。

「クランちゃんも、ああいう子を食べちゃうんだぁ……」

言い方がえげつないわよ、ホール長。まあ、この店は裏でそういうこともやっている店だからね。

「じゃ、ホール長。写真お願いね」

「ええ。彼の顔写真を取って、天道寺さんの所に送ればいいのね？」

天道寺とは、私の「自称」保護者である妖精学者（フェアリードクター）のこと。名前だけは古風な奴だ。その天道寺とは先日、彼の身辺調査をしてくれるよう約束させたんだけど……なにより調査の元となる情報が無いことには始まらない。そこで私は彼の顔写真を店内の防犯カメラで撮影してくれるようホール長に頼んでいたわけ。名前とか、そーいうパーソナルデータはこれから私が聞き出すってところ。

それにしても……なんでこんなに気になるんだろう、あの子のこと。自分でもちょっと疑問なんだけど……やっぱり久しぶりに「いい男」だからかな？　それしか理由が思いつかないのよね。ま、いつもいつもロリコンの変態ばかり相手にしてきたから、ようやく食らいついた良質な獲物に涎（よだれ）が止まらないってだけなのかもね。

「何度も来てくれたんだって？　律儀ね。可愛いところあるじゃない」

長身のお姉さんキャラなら決まる台詞なのにねと、見た目少女の私が自分で口にしといて笑ってしまう。その笑みが彼には自分への微笑みに見えたかな、それともさっきの台詞の効果か、頬を赤らめてるわ。ホント、可愛らしいわ。私はそんな彼の様子を見てまた笑みを浮かべつつ、同じテーブルの対面席に腰掛ける。どうでもいいけど、この店の椅子は私には高すぎるのよね。テーブルに手をかけてよじ登らないと座れないんだもの。

「うん……遊びに来てって言われたし……」

言われても、興味なければ来ないわよね。それもこんな店……メイド喫茶なんかに。この子はたぶん、この手の店は初めてなんだろうな。来店したときから恥ずかしそうにしてたし。それでも来てくれたなんてねえ……んー、ますます可愛げあるじゃない。周囲でな

んかじっとこっちを睨んでる下僕どもとは大違い。
「そう。つまり、ナンパの続きってことね？」
「いや、そうじゃないんだ。ホント、それは勘違いで……その……」
なによ、人が折角ここまでお膳立てしてあげたのに、そこまで全力で否定しなくてもさ。ま、気持ちはわかるけどね。
「お姉ちゃんに似てるって話だっけ？」
「はい……本当に、突然変なこと言い出してすみませんでした」
彼にとっては、この謝罪が一番の目的なんだろうな。テーブルに両手を突き、深々と頭を下げている。彼にとってはこれで良いんだろうけど……小さな女の子に対してここまで頭を下げる光景って、端から見ている分にはかなり凄いことになってると思うよ？
「いいわよそんなこと。それより、本当に似てるの？」
「はい。本当にソックリで……姉が生き返ったのかと思ったほどでした？」
「生き返った？」
思わずオウム返しに聞き返してしまった。
「あっ……はい。姉はボクが小さい頃に亡くなってしまって……」
なるほどね。いや、薄々そういうことかなぁとは思ってたけど。だってさ、普通姉のイメージといえば「年上」なはずで、本当にソックリでも幼少の頃の姿がすぐに現実の映像と被ることはなく……つまり、彼の中で姉のイメージが幼少の姿で止まっているから、私を姉に似ていると思ったんだろうなぁと。
「そう。悪いこと聞いちゃったわね」
「いえそんなこと……ないです」
まあ定番の台詞だけど礼儀としてね。実際予想通りだったとしてもあまり気持ちの良い質問ではなかったし。
「それで……姉にそっくりな私を見つけて、思わずナンパしちゃったって事？」
「いやそういうわけではなくて……」
場の空気を入れ換えるために、私はすぐさま彼をからかった。恥ずかしそうにしてる姿をみて、思わずにやけてしまう。
「なーにぃ？　もしかして、シスコンでロリコン？」
これももちろん冗談の延長……のつもりだったんだけど……。
「なによ、図星？」
茹で上がるかと思うほどに顔を真っ赤にし、俯く彼。本気でそうなの？
「両親が言うには、生まれたときからずっとお姉ちゃんっ子だったらしいです」
俯いたまま、それでもけなげに答える彼。なんか聞いた私が悪者みたいね……これじゃ。参ったわね……流石にこれではこれ以上からかえないわ。というか、これからこの子をどうやってホテルに連れ込もうかってところなのに。
「あの……クラン、さん、で、よろしいんですよね？」
私の胸元に付いているネームプレートを見ながら私に問いかけてきた。
「ええ……出来ればあなたの名前も聞かせてくれる？」
「鳥羽、鳥羽誠です。あの、クランさんってこの店で働いているって事は……その……」
「見た目より年上かって事？　ええ、その通りよ。残念だった？」

ロリコンにも、容姿がロリならＯＫって奴とか実年齢も伴わないとダメだって言い張る奴とか、色々いるからね。まあ、後半のはちょっと問題あるけど……とりあえず、顔を激しく横に振りながら、誠くんは否定してみせた。
「むしろホッとしています。小さな女の子からナンパだとか付き合って良いとか、ボクが言わせてるのかなと思ったら……」
「それはつまり、実年齢がＯＫならデートに誘ってくれるって解釈で良いわけね？」
慌ててる慌ててる。いやいやいやと言葉で言い手を激しく振りながら否定はしているけど、顔がちょっと嬉しそうなの、隠し切れてないぞ。ホントにもー、可愛すぎるわこの子。
「なら決まりね。着替えてくるから、ちょっと待ってて」
「え？　いや、だからそういう事ではなくて……」
否定なんて聞き入れないわよ。ここで一気に畳み掛ける！
私はさっさと椅子から降り、スタッフルームへと急いだ。流石に追いかけてまで私を止めようとはしない彼は、黙って席に座ったまま。私からは見えないけど、たぶん真っ赤な顔をして俯き固まってるんだろうな。ふふ、さーて……どうやって食べちゃおうかなぁ。私は思わず垂れてきた涎を拭きながら、スキップでもしそうな勢いでスタッフルームに入る。

まずは二人っきりで静かに話せる場所へ。そう言って私は、彼を最初のデートスポットに誘った。
「もしかしてラブホは初めて？」
私は手慣れた感じで、人目の付きにくいルートを選びながらラブホテルへと直行したんだけど……その間も彼は緊張してたみたいで、目の前にラブホテルが見えたときの反応といったら……ふふ、思い出すだけで笑いがこみ上げてきそうだわ。
「なんか誠くんって見た目童貞っぽいけど、どうやらその通りみたいね」
シスコンで、その対象の姉が少女のまま止まってしまったが故にロリコン。それでは確かに、なかなか異性と関係を持ちづらいかもね。たぶんこの子の顔立ちからして、モテてはいると思うんだけどねぇ……もったいない話だけど、私にはラッキーかな。
私は今ラブホテルの一室でベッドに腰掛けている。彼は立ったまま硬直してる。さすがにこの展開に思考が追いつかないかな。その固まった思考に、色々とすり込んでしまいましょうか。私は新鮮な獲物をじっくりとたっぷりと味わうために、彼の性癖に付け入ろうと策を練る。
「シスコンでロリコンか……言い換えれば変態よね」
ピクリと、私の言葉に反応する彼。当然だけど自覚はあるわけね、色々。
「童貞で変態な誠くんは、お姉ちゃんにこんな所へ連れ込まれて興奮してる？」
ギュッと握った手が震えてる。むろん顔も赤い。でも、否定の言葉はない。その代わりに、彼の股間が見て判るくらいに膨らみ、私に返答している。彼にとってまさに理想通りの少女が、今目の前にいる。そしてその少女が、姉が、自分を誘っているのだ。理想が現実となり、興奮を禁じ得ないのは当たり前か。
まだ会って間もない少女に翻弄（ほんろう）され、でも理想通りの展開へ持ち込まれる。彼の固まっ

たままの思考では、理性が崩れるのを押さえることは出来ないはず。
もう彼は、私のもの。
「ねぇ、ど変態の誠くん。君は「こんな物」に興味はある？」
ベッドの上に立ち、私は彼の目の前で自らスカートを持ち上げる。彼の目は、スカートの中に隠れていた私の下半身に釘付けとなった。それはそうでしょうね。私、下着を履いていないから。露出した、まだ毛も生えぬ恥丘が露わになっている状態。それを彼は息を荒げ始めながら凝視している。
「大ありって所ね。いいわよ、触るなり舐めるなり、好きなようにして」
まるで催眠術にでも掛かったかのように、彼はふらふらと私の方へと近づき、四つんばいになる。そしてじっと私の恥丘を観察した後、ぺろりと舌を伸ばした。
「んっ、いきなり舐める方を選ぶなんて……やっぱり変態ね」
私の言葉に頬を赤らめながら、しかし初めて味わう女性の味に、彼は夢中になっている。テクニックとか、そんな物は童貞の彼が持ち合わせているはずもなく、ただ夢中になって舌をピチャピチャと音を立て舐め回すだけ。
「まるで犬みたいね」
いつの間にか、彼は更に顔を押し当て、私の腰に手を回しより密着させていた。息をする事すら忘れる程、彼は舌を動かし続ける。
「ほら、ただ舐めるだけじゃダメよ。舌を「中」に入れるように……そう、上手じゃない」
言われるままに、彼は舌を矢尻のようにピンと伸ばし、私の「中」へと押し入れていく。ぐいぐいと顔も近づけ、懸命に奥を舐めようと必至になっているその様子は、確かに犬のようだ。
「クリトリスって解る？　そこより上にある……そう、それよ。それも丁寧に舐めなさい」
僅かに突起した陰核。彼はそこを舌先でアメ玉を転がすように、丁寧に舐めていく。
「んっ、いいわよ……そう、上手ね。もっと舌で突いてみたり……そう、それよ。んっ、いいわ、もっとやってごらんなさい……」
私もいつの間にか、徐々に快楽の声を上げるようになっている。それが嬉しいのか、彼は言われるままに陰核や陰門を舐め続けていった。
「んっ……もういいわ。ご褒美をあげるから、立って服を全部脱ぎなさい」
もう少し舐めさせても良かったかなぁと気持ちが少し尾を引いたけど、私は次へ進むよう促す。そして彼は言われるままに服を全て脱ぎ去った。
「あら、童貞の割りには「良い物」持ってるじゃない……皮もむけてるし」
全裸で直立している彼。私は彼のぶら下がった肉棒を手でチョンチョンといじりながら、感心していた。可愛い顔してこんなの隠し持ってるなんて……ふふふ。
「あら？……あはは、でもやっぱり童貞君だね。こんなんでも良かった？」
軽く私にいじられた事、そして何より少女に全てを見られている事。それらが彼を興奮させ、そしてその感情は彼の肉棒へダイレクトに伝えられた様子。上へと向き始めた肉棒を、私は嬉しそうに眺めている。
「それじゃ、ご褒美ね」
そう言うと、私は小さな口で肉棒の先端をくわえ込んだ。唇はカリの部分を刺激するよう何度も往復し、そして舌先が尿道を突く。小さな手は彼の陰嚢（ふぐり）を優しく撫でるよう持ち

上げ、そして軽く揉み始める。
「あぁ……お姉ちゃん……」
経験した事もない、快楽の大波。その攻めに耐えきれず、彼は快楽の声と共に思わず「お姉ちゃん」と口走る。止まった思考と壊れた理性では、もう私を「クランさん」とは見られないだろう。
「……いいわよ、私の事を「お姉ちゃん」と呼んでも。その方が気持ちいいんでしょ？」
私は姉として許可を下し、ご褒美を再開させる。この際私は、空いた方の手で棹を擦りだした。これで唇と舌、両手の四点攻め。童貞君にこのご褒美はさぞや夢心地に違いない。
「おっ、お姉ちゃん……もう……」
さすがに我慢出来ないわね。彼が射精が間近である事を私に告げてきた。しかし私はちらりと彼を見上げるだけで、まったく手も舌も唇も休める気はない。
「もう、でっ、出る……んっ！」
大量の白濁液が、私の口内になだれ込む。それを私は喉を鳴らしながら飲み込み、そして管に残る白濁液まで吸い出していく。
「……ごちそうさま。どう？……って聞くまでもないわね、あれだけ出したんだから」
僅かに口元から零れた弟の子孫を指ですくい舐め取りながら、私は見上げながら微笑んだ。この仕草、そして何より叶わないと思っていた夢が今、現実になっている。その事実が更なる興奮を呼び起こしたのだろう。彼の肉棒がまたそびえ起ってきた。
「早いけど、流石に元気だけはあるわ。もうこんなにしてるなら、すぐに入れられそうね」
そういいながら、私はスカートをまくったままベッドの上に寝そべり、そして足を大きく開き彼に見せつけた。
「ほら、入れたいんでしょ？　お姉ちゃんの中に。いいわよ、遠慮なんかしないで早……んっ！」
私の言葉を最後まで聞くことなく、彼は自分の分身を姉の中に付き入れていた。そして私をしっかりと手で支え、狂ったように腰を動かし始める。
「もう、んっ、せっかちね……いいわ、その代わり、気持ち良く、させてよ……んっ」
彼は無我夢中で腰を振り、姉の中と、時折漏れる姉のあえぎ声に息を荒げていった。自分が童貞を失ったという記念すべき瞬間を忘れる程無我夢中に。
「そう、いいわ、もっと深く、そう……んっ、その調子、続けて、あっ、ん、いいわよ誠くん……」
なんだろう……テクニックもなくただ乱雑に腰を動かしているだけなのに……気持ちいい。これまでに感じたことのない、快楽？　悦楽？　なにか暖かく心地の良い感情が私の中に溢れてくる。獣のような弟に抱かれ、私は幸福感に包まれている。
ただやはりというか……この感情は長く続かない。
「ちょっ、ん、もう逝っちゃったの？」
いつの間にか、彼は私の中に二度目の射精をしていた。それもそうか。童貞だったんだものね。
「まあ……仕方ないわね。どう？　童貞を卒業できた気分は」
うなだれる彼を、姉は優しく慰めてみた。優しく？　ちょっと違うかな。でも……なんだか、落ち込んでる彼を見ていると、更に愛しさが増してくるような。まるで本当に彼の

姉になった気分。
「……良かった……です」
息絶え絶えに口にした感想。たぶん彼の中ではもっと色んな感情が渦巻いてるんだろうけど……それを口にしろって方が無理ね。
「ほら、休む暇なんて無いのよ？　仰向けに寝なさい」
でもここで手をゆるめる気はないわ。折角の獲物。折角、今までにない快楽を味わえるチャンス。絶対逃さない。もう私無しではいられないくらい夢中にさせるんだから！
言われるまま彼が仰向けに寝そべると、私は愛らしいあんよを懸命に広げ彼の上にまたがった。むろん、またがる位置は腰の上。
「今度はお姉ちゃんがしてあげる」
手で彼の肉棒をしごきながら、私は不敵に微笑む。再び充分な堅さになる彼の肉棒……この肉棒は私の物、絶対離さないんだから……私はこれを、自ら自分の陰門へと導く。
「んっ！」
そして一気に腰を下ろした。
「ふふ、若いだけあって、ん、まだ元気ね……ほら、お姉ちゃんを、ちゃんと満足、させてよね」
二度も果てた彼と違い、まだ私は一度も達していない。それでも気持ちは充分に高まってきたし、今度こそ、私も満足したい。その気持ちが私の腰を大きく揺さぶらせ、私の腰使いに不慣れながら彼も合わせるよう下から大きく突き上げてくる。
「ね、服の上からで、いいから、お姉ちゃんの、胸、揉んで、ね、んっ」
私は自ら彼の手を引き上げ、自分の胸に押しつける。僅かに膨らんでいる私の胸を、彼はがむしゃらに揉み始めた。揉む、というよりさすっていると言った方が表現としては適切かな。たぶん手に集中すると、腰が止まってしまいそうなのを嫌っているみたいだから、うまく揉めないのね。もー、そんな不器用な童貞君が可愛いわぁ。
「がんばって、もうすこし、だか、ら、あっ！　いい、もっと、ても、んっ、こしも、うごかして……あはぁ！」
私の声は次第に、喘ぎ一色になってきた。もう少し、もう少しで、私も逝ける……。
「いく、いけるわ、あんたも、んっ！　いき、いきなさい、あっ！　んっ、ほら、いくの、よ、ねっ、んぁっ！」
私の中で、彼の肉棒がビクビクと跳ね膨らみと堅さを増している。三度目の限界がそこまで来ているのは確かだけど……まだ逝かないで、ちゃんと、ちゃんと私を悦ばせて！
「ほら、もっと、ん、いける、いく、いくから、ほら、んっ！　いい、いく、いくわよ、いく、いく、いく、いっ、んっ……んはぁっ！」
ピクッと私が身体を震わせ背を反らせたのと、彼がベッドの上で背を反らせたのは、ほぼ同時だった。三度目だというのに、彼の射精は止め処ない。ああ、逝きながら射精されるって気持ちいい……一滴も逃すまいと膣に力が入り、彼の全てを快楽に変換していく。
「どう？　お姉ちゃんに二度も出しちゃった感想は？」
繋がったまま、私は感想を求める。が、荒い息ばかりで言葉が出ない様子。ふふ、そんなに気持ちよかったかしら？　なんだかそれが嬉しくて……自分が逝けたことと彼が逝けたことが、こんなにも嬉しくなるなんてね。どうしちゃったのかな私……こんな気持ち初

めて。なんだろう、この気持ち……幸せだけど、なんか怖い。
怖い……そうね、この後のことを考えると、確かに怖いわ。
幸福感が一気に冷める。私は彼の腰から立ち上がり、まだ残っていた彼の精子を股に感じながら見下ろし、大切な「手続き」へと移す。
心が痛い……これは今までだって「客」達にしてきたことなのにな……なんでこんな罪悪感を感じるんだろう。
「随分気持ち良かったみたいね。それじゃ、その分キッチリ頂く物は頂きましょうか」
声のトーンが今までとは明らかに違う。流石に彼もそれを感じ取り、息を整えながら不思議そうに私を見上げていた。
頂く、という言葉でどんなことを想像しているのかな……彼の顔が引きつり悲しい目をし始めた。おおかた、金銭を要求されると思っているのだろう。いきなりラブホテルだものね。事がうまくいきすぎたのは、私が売春婦だからだと、そう考えてるのかな……でもね、そんな優しいものでもかわいげがあるものでもないのよ。真実はもっと意外で、そして信じられない物だから。
「あんたの脳髄……たっぷり吸わせて貰うから」
ニヤリと口元をつり上げる。そのつり上げた口元が徐々に尖り始め、顔が形を変えていく。ホラー映画の最先端ＳＦＸでも見ている心地……かな、彼は。私の顔は、そして身体は、一羽の鳥へと変貌していく。
「大丈夫、すぐに済むわ。痛みを感じる間もなく、すぐに吸い尽くしてあげるから」
あまりの事に身体が硬直してしまったのか、彼は全く動こうとしない。唇も同じく。
どう反応するのか……それで私の出方を決めるつもりでいた。普通は逃げようとするなり命乞いをするなりしてくるから、それに合わせ「脅し」をかけ様子を見て、客として迎え入れるか私の全てを忘れてもらうかを決めた。だから……この展開に私はちょっと戸惑っている。この姿だと戸惑っていることが彼に伝わりづらいのは幸いだわ。
「……じゃあね。新鮮で良かったわ、誠くん」
このまま、私は行動に移す。鋭いクチバシを彼の脳天めがけ振り下ろす姿勢を保つ。
彼は……誠は、微笑んだ。
「ありがとう……良い夢が見られました……」
この状況で、その言葉？　どういうつもりよ……困るわよ、それ。私は迷い、しかしすぐ決断し、クチバシを振り下ろした。
こうなったらもう……仕方ないじゃない。
振り下ろす瞬間、流石に誠は目をつぶった。目をつぶったまま、しばらく彼は動かなかった。
そして、時はそのまま流れる。
誠がそっと目を開け始める。
「もう……冗談よ」
クスクスと人の顔で笑い、私は目の前にいる弟を、人の手でギュッと抱きしめた。